



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第18回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

水平軸と垂直軸

前回の弥次喜多問答は、「赦し」がすぐれて神学的な主題である、というところで終わりました。今回は、行きがかり上、どうしてもその続きを書かねばならないのですが、実はまだ自分でも上手に整理ができていません。わが家で妻に話してみたところ、まったく理解してもらえず、しまいには怒り出す始末です。でも、読者のみなさんは、もっと理解力

に満ちた心やさしい方々だろう、と願いつつ、おそろおそろ書いてみます。

ダビデのバテシバ事件を思い起こしてください（サムエル記下11章、口語訳を使います）。自分の身勝手な情欲のために、部下の妻を寝取り、隠蔽工作が失敗に終わったと見るや、その忠臣の部下をわざと戦死させて、妻を横取りする——ダビデの生涯のうちで、もっとも暗く醜い時です。

ところが、そのダビデは、預言者ナタンに正面から悪事を指摘されると、「わたしは主に罪をおかしました」と告白します。彼が書いたとされる詩編51編では、さらにはつきりした言い回しです。「わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました」。

ありやいや、と思う人も多いでしょう。信仰深いダビデ先生、自分の罪を告白するのは結構ですが、ちと回りのことを忘れていやし

ませんか？ あなたの罪のために、ウリヤは死んでしまったんだし、バテシバは慰みものにされたあげくに夫を失ったのですよ。そして、そのあなたの罪のために、生まれてくる子は死なねばならないのですよ……。

フェミニニスト的な再解釈を待つまでもありません。ダビデはここで、あまりに自分の罪ばかりを気にしていて、その罪の犠牲となった人々のことを何も考えていないように見えます。自分が対人的に引き起こしたとんでもない悪を等閑視して、それをさつさと信仰の問題に翻案してしまっている。いかにも（男性）神学者のやりそうなことではありませんか！

ここには、「現代社会の座標軸」というタイトルをもつこのシリーズで、ぜひとも考えるべき大切な問題があるように思っています。「座標軸」は、水平線と垂直線でできています。その両方がないと、座標は成り立ちませ

自分の犯した罪の大きさを知り、
相手の痛みと悲しみの大きさを知り、

しかもそれを償うことが不可能であると知ったなら、

人が神に求めるのは赦しではなく自己への断罪でしょう。

だからそれは、ダビデのように神への告白になるのです。

それは、水平軸を忘れ去つてのことではなく、

むしろそれを強く意識するからこそなのです。

ん。もしダビデがここで、对人的な水平軸を忘れて、垂直軸だけで神に向き合っているのだとしたら、右のような批判は免れないでしょう。

けれども、わたしはそうとばかりも言えないように思うのです。ダビデのあの言葉は、自分の罪の犠牲となった人々を見失つての言葉ではなく、かえつてその人々のことを痛感するがゆえの言葉ではないか。その人々が失ったものは、もはやどんなことをしても取り戻すことができないほど大きい、ということを知つてこそその言葉ではないか、と思うのです。

わたしたちのなすことの多くは、取り消したり元に戻したりすることができません。と

りわけ、相手に深い傷を残すような悪は、取り返しのできないことばかりです。どんなにたくさん賠償金を課しても、どんなに重い刑罰を課しても、それで失われたものが帰ってくるわけではありません。

自分の犯した悪事は、どんなことをしても償うことができない——そのことを心から深く自覚した人は、いったい何をすることでしようか。きつと、相手に赦しを求めることもできないのではないかと思えます。赦しがありえらんと考えることすら、相手に対する冒瀆だからです。その時わたしたちの目は、どうしても天を仰ぐことになりません。

いえいえ、それは、赦してくれない相手の代わりに神さまに赦してもらうためではありません。

ません。むしろ、水平関係においてはけつして赦されず、自分は赦されないままに生きてゆかねばならない、という覚悟をしっかりと心に刻みつけるためなのです。自分の犯した罪の大きさを知り、相手の痛みと悲しみの大きさを知り、しかもそれを償うことが不可能であると知ったなら、人が神に求めるのは赦しではなく自己への断罪でしょう。だからそれは、ダビデのように神への告白になるのです。それは、水平軸を忘れ去つてのことではなく、むしろそれを強く意識するからこそのことではないか、と思うのです。

すべての罪には、社会的な原因と社会的な結果があります。しかし同時に、すべての罪は、社会的な関係を超越したところで起きます。なぜなら、人間は自由な存在者だからです。人間は、あくまでもみずからの自由な決断において罪を犯します。そして、罪において「単独者」となり、神の前にひとり立つ者となります。

わたしたちは、ふだんは水平軸だけを意識して生きています。しかし時にそこに、破れ目が生じます。その時わたしたちは、自分を貫く垂直軸の存在に気づかされます。その直下に身を置く時、はじめて「キリスト者として生きる」自分の座標が定まるように思えます。「罪」と「赦し」は、わたしたちにこの二つの軸の交錯を垣間見させてくれます。Ω